【著書紹介】

自著『ええ、政治ですが、それが何か？』（明石書店、2014 年）を語る

岡田 憲治

はじめに

本著『ええ、政治ですが、それが何か？』（明石書店、2014 年）を著した主な目的は二つである。一つは、人間の活動としての政治をいま一度「救出」することである。もう一つは、「政治とは何か？」という巨大な問いに対する各々の解が「政治の定義という名の“政治の展望”であること」を示すことである。

不幸なことに、政治はあまりにも壮大な期待と問題の空間に丸投げされつつ、同時に面罵と怒号に晒され続けている。しかし、逆に考えれば政治のイメージがこの社会で極めて限定的にしか共有されていないことは、反転させれば「豊かな定義が未来を開く」ということになる。

こうした目的から、筆者は政治と人間の関係をめぐる知見や認識を「統治エリートのための学」に限定することなく、「市民のための学」として広く社会に向けたメッセージとするために、本書を一般書という形式で上梓した。政治をめぐる言語を、その言語の社会関係における位置を含めて「政治的なるもの」と考察する、いわば知識社会学的問題意識を手放すことなく紡ぐならば、筆者にとってこれは一つの思想的選択である。

政治の風景の変化：政治的コミュニケーションの量的拡大と質的劣化

今日、いわゆる SNS の発展と浸透によって、最低限のコンピューター操作が可能である者は、原則として公共空間に自由に己の政治的主張を発信できることとなった。ここに様々な政治的意図をもって自らも回路を設定する政治家・メディア・言論関係者も参入し、

そこでは有権者は低い障壁を軽々と越え、直接に彼らにメッセージを送れるようになった。

こうした政治的コミュニケーションの容易さは、生の言葉でのやりとりする人々の作り出す「政治的気圧配置」を直接的に把握することを可能にし、同時にマス・メディアがかつて果たした「取り上げるに値する内実と形式の維持のためのフィルタリング」という機能も相当程度縮減させてしまった。その結果、無限定かつ未成熟な、そして政治を論評する者たちが共有してきた言葉の範囲を逸脱するやりとりが溢れ、SNS は今や部分的に人々の感情発露の場となっている。

人々の「巷の声」は、かつては種々の社会的中間集団がそれを吸収し、穏健なる「名もなき人民のため息」へと翻訳されたものであった。しかし、今日劣化した感情を大量に含んだ政治的言説は、その実態はデジタル的位相の中で不確定なまま、それでいて高度情報化社会にあってそれを無視し得ぬと忖度する為政者によって政治的に利用される。そのため政治的コミュニケーション手段の発展が、政治的発言をするプレーヤーの爆発的増大とともに、皮肉なことに、総体としての政治的言説の劣化と交通整理不能な錯綜した言論状況を作り出している。

変わらぬ基本認識としての「政治＝特殊活動」

このように政治をめぐる言語状況は変化し、政治的なコミットメントのあり方も変化する中で、唯一あまり変わらないものがある。それは、相も変わらず政治を「特別な者たち」による、「特別な活動」として、「特別な目線」でとらえるという人々の基本態度である。

有権者と政治家の距離は縮まった。国会で行われる審議の直後に、院内での発言が「院内のスマートフォン」を通じて院外に伝わり、早くもそこに有権者の私的所感が返され、時としてそれはおびただしい人々に増幅して届けられる。しかし、とりわけ政治家の持つ政策や信念のみならず、その私的たたずまいや彼らの道徳的判断や行動が問題となった時、人々と政治家の間にある距離感は極端に疎遠となる。正確には、同じ人間としての地平を共有することなく、極めて不寛容な言葉と態度によって断罪がなされることで、カジュアルなコミュニケーションの相手としての政治家は、突然「別世界の特殊な存在」へと引き戻され、己を内面から縛る道義や道徳の寛容さを置き忘れてきたかのように、「完全無欠なる国民の選良」という、未だ地上に存在したこともないような理念型を基準に悪罵の対象とされるのである。政治家には固有の職業倫理があることは当然だが、人々は政治家を特別に高い道徳的基準を通じて引きずり降ろそうとするのである。

本書第一部「出発点を確かめる」、第二部「思い込みをとく」は、民主化と大衆化を経た 21 世紀の政治においてなお、強い心の習慣を反映させた「特別な活動としての政治」という認識を、様々な視点から相対化する試みである。

第一に、人々は政治というものの「遍」在性（「偏」在にあらず！）に対して、変わることなく鈍感である。他者と自己の欲望、そして各々の意思の不可知性を前提にした時、人間の複数性から生ずる相互作用を通じて、一定の秩序を「作為」として構築し、様々な“interest”（利益関心）を実現させようとする営みは、言うまでもなく永田町やオフィス・ホルダーとしての政治家の周辺のみで生ずるものではない。より原初的には、乳児が二種類の泣き声を母親に対して使い分けた時、すでに最初の政治が始まっているのである。

人は、マンションの管理組合の理事になることを回避しようと工夫し、幼稚園の行事で負担の少ない業務を担当するよう画策し、会社や職場では己の自己利益を最も低コストで実現させるためにあえて暗愚なるリーダーを推薦し、私的なる暗闘を公的なる競合へと捻じ曲げて翻訳させるために百の言葉を動員して問題の位相をすりかえる。娘は、父親の弱みに付け込んで物質的欲望を満たす資源を得ようとし、息子は自我の成長と人間の個体化の速度の差異にうろたえる母親からの干渉を避けようと計算する。すなわち、政治はすべての人間が行う、世界と自己との関係を自覚的に制御する行為に他ならない。

筆者は、この政治の遍在性を念頭に、以下のように政治を定義することを議論の出発点とした。政治とは、

「この世の解釈をめぐる選択を、あくまで言葉を通じて不特定複数の他者に示すこと」[1)]

である。

政治的中立という偽概念

つまり政治とは、「世界は自分にとってこういうものであって欲しい」という価値に依拠した世界解釈を言語化することである。このように定義することで、民主政治を担う者たちは政治に直面して二つの契機を獲得することが可能となる。第一は、「原理的には政治的無関心というものは存在しない」という前提によって、政治的中立性という偽概念 (Quasi-Begriff) への陥穽を回避できることである。

1） 岡田憲治『ええ、政治ですが、それが何か？』、明石書店、2014 年、三四頁。

いま一つは、様々な人間の有限性を踏まえた上で[2)]、政治を人間の日常的な「社会技法」とさせることで、個人が潜在的にもちうる様々な政治的な能力、そしてそれが蓄積し、複数化することで生まれる社会が用意する政治的諸力を肯定的にとらえ返すことが可能になることである[3)]。

政治を特別な者たちによる特別な活動であるとする認識は、この世界に「政治的中立」という無垢なる安全地帯があるというナイーヴな認識と裏表の関係にある。筆者はこの問題を、政治をひたすらネガティヴなものへと塗り込める思い込み（政治をめぐる４K）を詳説した第二部の第三章において深刻なものとして取り扱った[4)]。

論理的思考においては、中立とは何らかの実態を示すのではなく、ある基準に照らした時の相対的「位置」を示す概念に過ぎない。つまり、極と極をどのように設定するかによって、中立点は作為的に移動可能となる。また所与の空間・時間的条件においては、例えばマス・メディアにおける完全中立的報道は原理的には不可能であり、報道の切り取り方は、多分にコンテクストに依存している。加えて、二〇世紀以降の行政国家化によって、市民社会の独立性の原理としての「公共性(publicness)」が国益の引照基準へと読み替えられ、日本社会では「中立性＝公共性＝非政治性」という驚くほど政治的な定式が自明視されている[5)]。非政治の名の下に政治的なるものが機能しているのである。

こうした「政治的なる領域」と「政治とは無縁な領域」の区分は、悪しき政治から脱すること、距離を置くこと、政治の悪に手を染めないこと、政治には関わらないことの表現としての「投票に行かない」という選択的行為の持つ政治性をもまた不可視なものとさせてしまう。すなわち「投票に行かない」ことは、「悪に加担しないこと」であり、「無言をもって腐敗した政治に抗議をする声なき声である」という、非常に危険なカタルシスをも

2）　2 政治における人間の抱える条件とは以下である。人間は、(1)確定された自分などというものがなく、(2)他者のことは本来的に理解できず、(3)すべての場面で正しい判断もできず、(4)心根はさほど悪くないのにどうしても自分を優先してしまいがちで、(5)偏見や思い込みから逃れられず、(6)暴力の恐怖から自由になれず、(7)自分が世界を解釈するやり方に依拠して(価値観)、たくさんの選択肢の中から、(8)明日は別の判断になるかもしれないけれど（暫定性)、(9)言語に支えられた肉体の運動（ムーヴメント）によって、(10)大中小の「決めごと」をしなければならない。同上、三三－三四頁。

3）　これは政治的価値を公的に表現するものを「主義者」とする、かつての精神的習慣から脱することを意味する。

4）　４K とは、政治は「暗くて汚い」、「カネがかかる」、「偏っている」、そして政治なんて「関係ない」の四つである。

5）　岡田憲治「自治体関係者よ、『公共』の意味を取り違えるな～『改憲』も『護憲』も、『再稼働』も『脱原発』も、みんな政治性を帯びている～」『The Huffington Post』、2015 年 4 月 22 日掲載 http://www.huffingtonpost.jp/kenji-okada/public-autonomy_b_5189083.html

たらす。

市場における商品選択とは異なり、政治的選択とは「非選択」という選択すら政治性を含意してしまう構造的なるものである。支持政党がないから棄権するという「政治選択」は、ゲームから降りる人々が増大すれば既得権益を通じて堅く組織された者たちの政治的勢力が相対的に大きくなるという当たり前の原理を想起すれば、主観的意識としての「脱政治」が著しく政治的に「機能」してしまうことは、政治のもたらす必然的な事態である[6)]。その意味では、政治の遍在性とはその「領域」のみならず、その「機能」においても明らかであると言えよう。

政治が人間の社会に遍く存在しているという認識は、「それゆえに政治から脱しようとする政治性」に対して人を自覚的とさせるのである。

「脱政治」ではなく「政治に対抗する政治」の覚醒

政治は特別な活動ではなく、遍く存在する人間の営為である。そのことに無自覚となった時、己の利益に反する政治勢力に加担することになる。それならばこれを反転させると、当然論理的には、政治の遍在性への認識は「政治に政治を自覚的に向かい合わさせる」ような、より主体的な政治的営為を促すことになる。

種々の政治的圧力に直面した時、強力な対抗利益をもち、まさにそのためによく組織された社会集団は、死活問題として「政治には政治で対抗する」ことを疑わない。輸出産業ばかりに恩恵をもたらす円安誘導が極端となれば、円高で為替差額を得る産業は、様々なロビイングや広報活動を通じて対抗パワーを動員するだろう。

しかし、未組織の個別の有権者、すなわち種々の政治的圧力に対応できない政治プレーヤーたちは、こうした活動において極めて脆弱である。その政治的圧力は、「名もなき庶民の胸のうち」と呼ばれようが、「ささやかな市民による抗議」であろうが、「有権者の離反」とされようが、巨大な組織化された権力機構である国家を前にしてひたすら無力となる。

しかし、にもかかわらず理論的に見れば、この場合もやはり政治は遍在しているのであって、政治そのもの、政治的構造が消滅しているわけではない。「秋祭りの経費をかけすぎる放漫財政の町会長に文句を言うべきだ」という世界解釈を他者（町内の人々）に伝える行為と、「数万年先の子孫に経済的、精神的負担と負債を押し付ける原子力発電はないほ

6）　岡田憲治「荒涼たる風景の中に生まれつつあるもの：『政治的』投票という成熟について」『Journalism』、朝日新聞社、2015 年 4 月号、通巻 299 号、一六三―一六九頁。

うがよい」という世界解釈をツイッターやフェイスブックに書き込みつつ野党の結集を促す行為は、原理的には何ら違いはない。問題は、そうした世界解釈をどのような土俵で行うかであり、そのためにはどれだけの他者の協力が必要であり、そのためにはどのような手段や組織が必要なのかだけである。

つまり、悪しき政治事態、社会の維持にとって有害な政治行為があれば、「政治には政治をあてがう」ということ以外に対応はないのであって、それは「政治はどこにでもある人間の通常の活動である」という前提によって導かれる通常の解だということだ[7)]。しかし現実には、政治によって被ったことは政治によって修復することを未だに我々の社会は当たり前の対応とする認識が弱いのである。

統一的定義のない「政治」の概念

本書の執筆の目的の第二は、多様なる政治の定義をスケッチすることによって、あらためて「定義という行為がもたらすもの」を確認することにあった。実は政治学という学問が他の学問領域と著しく異なる点は、政治の定義が政治研究者の間で共有されていないことである。「政治的なるもの」をめぐる議論に終始する思想研究はともかく、例えば政策研究、政策過程研究においては、政治とはひたすら「政策を歪曲させる因子」であって、その他の領域においても、いくつかの意味内容(implication) を曖昧に共有しつつも、各々の文脈における政治の含意もさほどの限定されることもなく議論が成立している。

確固たる合理的選択をする人間イメージである「経済人（ホモ・エコノミクス)」を不変のプラットホームにしながら、整然と実証を重ね続ける経済学とのコントラストは著しい[8)]。しかし、その多様性こそ政治という対象の最大の特徴であり、ハード・サイエンスとなりづらい政治学の性質を逆手にとれば、そこには人間の活動の豊かさを扱う、社会科学としての政治学の独自の役割があるだろう。

本書の第三部では、「イメージを広げる」と題して、これまでなされてきた「政治とは

7）　もちろん、言うまでもなく問われるのはそのこと自体ではなく、“how? ” である。

8）　経済人とは「最小限のコストで最大限の便益を得ようとする人間」である。これ以外の前提を持つ人間の行為は「経済行為」とされず、考察の対象から除外されるのであるから、精緻なる研究が蓄積されるはずである。また社会学においては、トクヴィルやデュルケームらによって、社会学という学問そのものを構築するために ” society ” という概念が立ち上げられたという面もあり、この場合は概念が学問を生成させたことになる（菊谷和宏『「社会」の誕生』、講談社、2011 年)。いずれもその基幹概念のあり方は政治学とは大きく異なると言わざるを得ない。

何か？」という問いに、その時代、その事態に直面した者たちの様々な知的格闘、実践的苦悩をスケッチすることで、曖昧かつ狭隘化されがちな政治のイメージをふくらませることを試みた。ここでは政治の定義が、人間の脳内や研究室ではなく、まさに人が生きる実践の場における試行錯誤を通じて紡ぎ出されることを示すことになった[9)]。

第一に、政治は「正しい世界を作ろうとすること」であるという視角から、古代ギリシャのアテネにおけるプラトンの苦悩と、そこから導き出された「哲人王」というイデア、そしてそこから二千五百年以上の時空を超えてアメリカ公民権運動による差別撤廃を求める政治を題材に、政治という営為を「正義の実現」として描いた。

第二に、政治は「自分で秩序を作ろうとすること」であるとして、世界を神の創造物ではなく、人間が主体的にはたらきかける「対象」と捉え返した、イタリアの政治家ニッコロ・マキャベッリの苦悩を通じて、政治におけるリアリズムをもたらす「作為としての政治」（丸山眞男）を説明した。これを通常我々は「統治(government)」と呼ぶ。

第三に、政治を「自分たち自身を支配すること」、すなわち「自治」としてとらえ、そのために自分たち自身が何らかのフィクションを必要とすること、その一つの表象としての社会契約論の意味づけを詳説した。「相互に協力しながら」という水平的な関係と、「意に反する決定に自発的に服従する」という垂直的な関係を統合する唯一のものは「合意」というフィクションである。政治はフィクションなしには成立しない。

第四に、政治を「戦いの勝者による支配であること」とする発想は、端的に「闘争としての政治」とすることができる。政治における「妥協と合意」という自由主義的含意のみではとらえ逃してしまう「決断と闘争」という契機は、ブルータルな政治の重要な側面であり、同時に政治と正面から向かい合う「自称リアリスト」たちの描く政治イメージに符合する。カール・シュミットとカール・マルクスは、まさにそれぞれの場と時代において、この問題と格闘した。前者は「法を超える領域」として、後者は「社会経済条件のもたらす帰結」として政治を描いたのである。

最後に、政治とは「これが現実だとさせること」だと定義することで、政治における他

9）　政治学研究者、とりわけ原理的な問題に関わる研究者ならば、この第三部の一章から四章までが、高畠通敏が一九七〇年代に著した不朽の政治学教科書における「政治とは何か」という項目を基礎としていることに気づくはずである。僭越ながら筆者は、この偉大なる先人の作業を念頭に、「現実を構成するものとしての言語」に政治の本質を見て、なおかつそこに権力の諸相を重ね合わせながら第五章の「現実観の統制としての政治」を描き加えた。これが成功しているか否かは、読者の批判を通じて明らかになるだろう。高畠通敏『政治学への道案内』、講談社学術文庫、三八－四二頁を参照のこと。

者の行為を調達する手段を描いた。他者に行為の指定をする際には、通常政治学ではその力動のモメントとして「権力(power)」という概念を用いるが、これは物理的な強圧から始まって「無意識の自発的服従」、あるいは「政治など機能していないという現実感の動員」、そして「沈黙の調達」に至るまで極めて多様である。しかし、その中に共通する「作為」とは、「これが現実である」という認識を常態のものとさせることである。そして、この営為こそ、まさにその遍在性に依拠した、豊饒なる政治のヴァリエーションなのである。

定義とは「展望」（visions）である

政治のもつ諸様相を多様に描くことで導かれるのは、政治の「定義」が、より精緻なるターミノロジーの構築に止まらないということである。実証のためのデーターの収集、それを何らかの操作可能な概念へと流し込み、そこから現実とのリレヴァンシーを見据えながら理論化を繰り返すのは科学研究の常道であり、社会科学においても有意味な比較・行動研究の基本であることは今更強調すべきことでもない。

しかし、政治学においては、多様なる人間の「生」の渇望、自由意思、その背景としての歴史、社会的諸条件、加えて人間のもつ知の不確実性、他者理解の不可能性、総じて人間と人間を取り巻く環境がもたらす不確定要因を排除することができない。したがって方法的な厳密さ、比較のための種々の操作化とは別次元で、政治の場に生起するある現象を定義することの中には、定義付けすることが助走線となり、そこから描かれる未来への「展望」が不可避的に含まれる。ある現象をどのように定義付けするのか、そこでどのような言語選択がなされるかは、その研究主体がそれを通じて政治にどのような展望をもちうるのかを同時に示すことになる。

例えば、政治を「正義の実現」と定義するなら、そこに世界を絶え間なく改革し、人間の抱える宿痾に挑戦する意思を持ち続ける世界展望を垣間見ることができるだろう。政治を「秩序形成」と見なす位置からは、人間の「生」の確保、社会的再生産を守らんとする展望を発見できる。政治を「自治」だと定義する地平には、根源的に平等な存在としての個人の姿と、そうした者たちが失敗を繰り返しつつ、斬進的にも成長して行く姿、そしてそこに「政治そのものの進歩」というヴィジョンが含まれよう。政治を「闘争」と見なす姿勢には、人間の含み持つ「反社会的欲望」と「政治そのものを超える領域」への畏怖とが響き合うような、非調和的な未来の展望が関わっているはずである。

そして最後に、自ら政治を「現実解釈の独占と統制」と定義する筆者は、この定義を通じて「政治においては言語こそすべてである」という前提のもと、この言語空間を自由かつ豊饒なものとして維持することに究極の政治的目的があるという展望を描いている。ここには、政治を通じた価値の実現、すなわち政治を道具として正義を実現するという目的よりも、むしろ「政治＝生そのもの」から、人間がその過程で政治とともに成熟を果たすための現代条件を考察するという政治学のもつ役割への、筆者自身の展望と自覚がある。

おわりに：社会における政治的ポテンシャルの覚醒

こうしてみると、筆者の本書の執筆意図の中心にあるのは、我々の社会における政治的ポテンシャルをどう覚醒させるかという問題意識である。政治という活動は、近代政治の前提に立てば「あえて」、「意図的に」、「作為的に」行う人間の主体的活動である。これが特定の人間による特別な活動とされて、その枠を出なければ、我々が社会の潜在的な政治諸力を活用できていないということになる[10)]。

もしこれを克服し、政治の言葉をある種の「生活言語」のレベルに引き込むならば、ひたすらネガティヴ・イメージに塗り込められた政治を、豊かなイメージとともに描きなおさねばならない。その意味では、政治の遍在性と政治の多面性を伝えんとする筆者の試みは、これも一つの「政治的営為」となるのかもしれない。

本書の狙いが、不可避的にその営為を含むとするならば、本書は研究者のみならず、一般有権者、そしてそこに新規に参入した若き学生に向けて提供せざるをえない。政治の遍在性を訴えるメッセージを専門読者数十名の媒体に載せることは一つの自己矛盾となるからである。もしこうした視点を維持しながらなおも政治学徒としての研鑽を積むならば、「読者対象によって一切の水準を下げることなく、それでいて一般有権者の生活言語へと翻訳をしながら詳細なる政治理解を送り届ける」という、経年の筆者のチャレンジがこの先も継続されるだろう。

---

10)　その意味で“ politics ”とは、ある位相においては“ political education ”と呼び変えることも可能であろう。Bernard Crick, Essays on Citizenship, Continuum, London, 2000. (バーナード・クリック／関口正司[監訳]『シティズンシップ教育論』、法政大学出版局、2011 年)